

いわての“大地”と “ひと”と共に



国立大学法人 岩手大学
地域連携推進部
地域創生推進課

〒020-8551
岩手県盛岡市上田四丁目 3-5
TEL.019-621-6629
FAX.019-621-6656
E-mail.sanriku@iwate-u.ac.jp

平成 30 年 7 月 24 日発行

<http://www.iwate-u.ac.jp/koho/newsletter.shtml> ◀岩手大学ホームページからもご覧いただけます。

date
H30.4~

「NEXT STEP 工房」創設

～地域に関わる学生の活動・
研究を支援するプラットフォームとして～

三陸復興・地域創生推進機構では三陸復興部門の教員が中心となり、学生が県内各地域をフィールドに、地域がかかえる課題や学生自身が課題と考えている事象について、その解決を図り、地域と共に成長することを目的に、地域活動・



組織の説明を行う
人文社会科学部 五味教授

研究支援のプラットフォーム「NEXT STEP 工房」を設置しました。

5月14日(月)、15日(火)には地域に関わる研究や活動を行っている、あるいはそのような活動に興味がある学生・教職員対象に説明会を開催しました。運営チームリーダーの人文社会科学部五味教授から、NEXT STEP 工房の構成や活動の内容、エントリー方法の説明があり、2日間で延べ70人以上が出席しました。参加者から質問や意見が多数あり、NEXT STEP 工房に対する期待や関心の高さが感じられました。



ワークショップの様子

6月3日(日)には盛岡市産学官連携研究センター(コラボMIU)を会場に、地域活動を行っているグループによる活動紹介、参加者同士の交流、新しい地域プロジェクトが立ち上がるきっかけ作りなどを目的にワークショップを行いました。ワールドカフェ形式※で『大学生が地域でできることは?大学生が地域でやりたい(やりたくない)ことは?大学生が地域ですべきことは?』をテーマに話し合い、「地元に残りたくなるようなまちづくりのために企業と連携していきたい」、「自分たちがやりたいことをやるべきではないか」、「卒業後も関わりを続けられるという視点も大事」など、地域に対する活動への多様な意見を共有する場となりました。その後、既存グループからのPRやフリートークが行われました。

NEXT STEP 工房には、6月中旬の時点で岩手大学生約60

名のほか、地域に関わる10団体・プロジェクトがエントリーしています。今後もエントリーの呼びかけを行いながら、ワークショップや地域活動に関する情報提供などを通じて、学生が主体となる活動を支援し、地域に根ざした取組をサポートし続けます。

※『カフェ』のようなリラックスした雰囲気の中で、少人数に分かれたテーブルで自由な対話を行い、他のテーブルとメンバーをシャッフルして対話を続けることにより、参加した全員の意見や知識を集めることができる対話手法の一つ。(出典:「ワールド・カフェの手引き」SPODフォーラム2012編)



興味のある団体とのフリートークの様子



最後に記念撮影

今後の予定

～7月	<ul style="list-style-type: none"> ・NEXT STEP 工房活動プログラム第1次応募 ・メーリングリスト運用開始 ・情報交換用掲示板設置
～9月	<ul style="list-style-type: none"> ・第2回ワークショップを実施 ・NEXT STEP 工房活動プログラム第2次応募 ・その他

date
4.4

学長定例記者会見にて オープン特許集、産学連携シーズ集および研究シーズ動画を紹介

学長定例記者会見にて地域創生部門長の今井潤教授が地域創生部門で作成した「オープン特許集※1」、「産学連携シーズ集※2」、「研究シーズ動画※3」の紹介を行いました。

「オープン特許集」は本学保有特許の有効活用と特許情報をきっかけとした共同研究等へつなげることを目的とし、また、「産学連携シーズ集」は研究

成果が使用されるシーンを想定したイメージ図を記載することで、地域企業等が抱える技術課題に対し、最適な研究者を探し出しやすくすることを目的に作成しました。これら

は、本学や自治体等が開催する地域企業向けイベント（セミナーやフォーラム等）で配布し、イベントの趣旨に合致するシーズや参加企業等に関連するシーズを紹介しています。「研究シーズ動画」につ

いては、事業化の可能性

が高いシーズを軸にこれまでの取組を研究者が自らの言葉でわかりやすく説明し、視聴した地域企業等が当該シーズの活用方法や適用分野を、より具体的にイメージできるように製作しました。産学連携シーズ集と研究シーズ動画は、三陸復興復興・地域創生推進機構 HP からご覧になれますので是非アクセス下さい。



産学連携シーズ集を紹介する
地域創生部門長の今井潤教授



研究シーズ動画の様子

- ※1 オープン特許集は、岩手大学で保有している特許の内、ライセンス可能な特許 28 件を紹介しています。
- ※2 従来の研究シーズ集は主に研究者の研究成果を紹介する内容でしたが、産学連携シーズ集は、身近な場面から研究者・研究分野を紹介する内容になっています。第一弾は農林水産・生活関連を中心に作成しています。
- ※3 研究シーズ動画では、平成 30 年 4 月にオープンした岩手大学「銀河オープンラボ」(次世代技術実証ラボ)に入居するプロジェクト(2 件)および産学連携の取り組み(2 件)などを紹介しています。順次増やしていく予定です。



オープン特許集



産学連携シーズ集



研究シーズ動画



連絡先

岩手大学 三陸復興・地域創生推進機構 地域創生部門

〒020-8551 盛岡市上田 4-3-5 岩手大学地域連携推進センター 棟2階

E-mail: chiren@iwate-u.ac.jp

TEL: 019-621-6491 (今井)

6293 (山下)

6294 (小川)

6684 (貫洞)

FAX: 019-621-6892

地域創生部門長からのメッセージ

三陸復興・地域創生推進機構

教授 今井 潤



この度、県内の民間企業等との様々な共同研究を活性化させるために、「オープン特許集」、「産学連携シーズ集」と「研究シーズ動画」を作成しました。

従来も様々な形で、研究成果などを情報発信してきましたが、専門の研究者が知りたい詳しい情報まで正確に記載されているものが多く、一般の人にわかりやすいものではありませんでした。

今回のいずれの媒体も、産学官連携の入り口に必要な

もので、研究の価値と具体的な商品や業種がイメージできるように工夫し、絵も多用することで、あまり詳しい情報は記載しないようにしました。これにより、その分野の専門的な知識があまりない支援機関や金融機関のスタッフも、気軽に企業に対して提案ができるようになりました。特に「産学連携シーズ集」は、人気があり、県内の支援機関・金融機関や今までに共同研究したことがある企業などへ送付しましたが、多くの機関から追加送付の要望があり、すでに在庫が少なくなっていました。このシーズ集を機に新たな共同研究も始まっています。

今年度は、工学部系の「産学連携シーズ集」vol.2を発行予定です。更に県内の企業の皆様と連携して新たな製品開発などに取り組んで行けたら幸いです。

date
3.29

平成28年台風第10号の経験を基にした防災教育教材等の贈呈式

平成28年8月30日、台風第10号により、岩手県では大雨による甚大な被害が発生しました。この経験をこれからの学校防災の充実に生かしていくため、地域防災教育研究部門を担う地域防災研究センターは、平成29年6月に、岩手県教育委員会及び岩泉町教育委員会と学校防災に関する協定を締結いたしました。

協定締結前からも、台風第10号に対する学校対応の課題や実例を紹介した「学校防災体制の充実に向けて」と題したリーフレットを作成し、県内の小中高校や教育委員会に配布するなど防災教育に関する活動を行っていましたが、協定締結後は、更に活動を活発化し、「学校版タイムライン」※作成や、盛岡地方気象台の協力を得て、児童生徒用の「台風災害に備える」防災教育教材の開発に取り組みました。

防災教育教材が完成した平成30年3月29日には、岩泉町教育委員会で、三上潤岩泉町教育委員会教育長に学校版タイムラインや防災教育教材を贈呈しました。

なお、平成30年度は、完成した防災教育教材などを活用し、教職員研修への講師派遣や、防災に関する授業への講師派遣を計画しています。

※学校版タイムラインとは、

学校を軸において、家庭や地域、所管の教育委員会等が連携して、いざという時、「いつ」、「誰が」、「何をするのか」を整理した、学校版の防災行動計画です。台風・大雨以外の災害でも作成可能です。



左から、松林由里子地域防災教育センター／理工学部助教、鈴木智香
岩手県教育委員会事務局学校調整課主席指導主事兼産業・
復興教育課長 三上潤 岩泉町教育委員会教育長
森本晋也地域防災研究センター／教職大学院准教授

担当教員からのメッセージ

地域防災研究センター
教職大学院 准教授 森本晋也



地域防災研究センターでは、台風第10号による甚大な被害を受けた岩泉町の学校の災害対応や大学への支援ニーズに関する聞き取り調査を行いました。調査から、安全を確保するための情報手段の確保などの課題が明らかになるとともに、台風や大雨に備えるための防災教育や職員研修などのニーズがあることが分かりました。

そこで、本センターでは、児童生徒や保護者を対象とした台風や大雨に関するアンケート調査をはじめ、盛岡地方気象台等の関係機関と連携し、児童生徒向け・教職員向けの防災教育教材の開発、岩泉町立門小学校をモデルとした「学校版タイムライン」の作成を行いました。教材の一つ「大雨・台風ワークショップ」は、付与される気象情報を基に、どのように対応すればよいかを話し合い整理していくものです。また、「学校版タイムライン」は、気象情報・防災情報に対して、学校が家庭や地域、関係機関と連携して、どのように対応していくかを時系列にまとめたものです。これらの活用によって、学校の防災力だけでなく家庭や地域の防災力の向上にも努めていきたいと思っています。

date
5.18

銀河オープンラボ開所

岩手大学は、事業化可能性の高い研究シーズを軸に、参画企業と研究開発から実証まで行う拠点施設「銀河オープンラボ」を開所しました。通常の大学研究室に比べてより現場スケールに近い、事業化一歩手前の「実証研究」を行うことが大きな特徴です。



銀河オープンラボの外観



テープカットの様子

5月18日(金)には銀河オープンラボの開所式を行いました。式では、岩手県政策地域部科学ILC推進室の佐々木淳室長、文部科学省科科学技術・学術政策局産業連携・地域支援課の西條正明課長、大学発ベンチャー企業である株式会社アイカムス・ラボ代表取締役代理の高橋宏利取締役管理部長から挨拶をいただいたのち、テープカットを行い新たな研究施設の開所を祝いました。

開所式後の施設見学会では、ここを利用して研究を行う教員が、分子接合技術や視覚再建技術、RSP(ロボット・センシング・プラズマ)による地域基幹産業の革新など、各々の持つ研究シーズについて説明を行いました。建物内には4つのオープンラボ、6つのプロジェクトスペースが設けられています。

岩手大学は銀河オープンラボを拠点として、今後は地元企業のみならず、公設試験場や産業振興機関他大学などとも連携していきます。そして、社会的インパクトを有する技術・研究の事業化を促進することで地域の雇用を生み出すなど、地域創生を目指します。

研究紹介

人と動物の共生をめざした支援活動

～災害時動物救護における地域連携システムの構築をめざして～

三陸復興・地域創生推進機構 三陸復興部門 被災動物支援班 山崎 弥生 (特任研究員)

動物と暮らすことは、人に癒しを与え精神的な安定を導くとともに、健康の維持・増進など、社会生活の安定に大きく寄与します。被災動物支援班は、被災した動物とその飼い主を支援するための「ワンにゃんレスキュー」派遣、被災地から保護された動物の健康管理や飼育施設の衛生管理の助言、さらに獣医師向けセミナーを定期的に開催し、教育活動も行ってきました。

小動物グループ



岩手県防災訓練の様子



VMAT シンポジウムで行われたパネルディスカッション

三陸復興・地域創生推進機構に改組後は「災害時動物救護における地域連携システムの構築」をめざす取り組みにも着手しています。現在、災害救助法の改正に向け、内閣府が取りまとめているですが、動物の救助について盛り込まれる予定はありません。動物救護については各都道府県および各市町村の行政担当もしくは地域の開業獣医師や飼い主の自助となっています。また被災動物への対応は、各地域における動物救護体制の整備状況によって大きく異なります。よって、大規模な災害が発生した場合、円滑な動物救護活動を進めるためには、行政、地域及び飼い主自身が協働して対応することが重要と考えます。被災動物支援班では、行政および開業獣医師が東日本大震災を経験して得た動物救護のノウハウや課題についての情報・意見交換会を行っています。また獣医師だけでなく、動物看護師、動物救護ボランティアの方々にも参加してもらい、災害動物医療支援チーム(VMAT)の発足に向けた活動もしています。さらに飼い主の方々へは、「ペット同行避難」を日常的に意識してもらうため、同行避難ルートの確保やペット防災袋の用意など啓発活動を行っています。

大動物グループでは、福島第一原子力発電所事故帰宅困難区域における低線量持続被ばく牛の飼養管理支援と継続調査を引き続き行っています。牛の飼育環境内における空間線量・土壌線量などから牛の被ばく線量を算出し、健康状態との関連を解析し、国際シンポジウムおよび国際学術誌にて発表しています。

大動物グループ



サンプル採取の様子



移動診療車における血液検査

三陸復興・地域創生推進機構組織図



釜石サテライトだより

平成28年度に設置した農学部食料生産環境学科水産システム学コース1期生が、いよいよ「釜石キャンパス」にやってきます。昨年6月に釜石キャンパス開設記念フォーラムを開催しましたが、その時は総合科学研究科地域創生専攻水産産業革新プログラムに在籍する大学院生1名だけでしたが、今年度後期には学部学生十数名(予定)がやってきます。

農学部水産システム学コースには6つの研究室があり、2つは盛岡市の上田キャンパスで、4つは釜石キャンパスで研究しています。釜石キャンパスの4つの研究室へ所属する学生は、釜石市に居住しながら

釜石キャンパスで卒業論文を作成することとなります。住居は釜石市民向けの定住促進住宅の一部を学生寮として使用させてもらうことになっていて、岩手大学生に対する釜石市民の期待は非常に大きなものがあります。釜石キャンパスは岩手県と釜石市から多大なご協力のご支援を頂き、新しい建物が今年度中に竣工の予定です。



岩手大学釜石キャンパス

釜石キャンパスに若い学生が集い、教育・研究の場として本格的な活動を始めると共に、釜石市民として地域に溶け込み、様々な地域活動に取り組むなど、地域活性化の一助となることを期待しています。

